

2302Nietzsche.pdf

2023.2 ブログ:「ツァラトストラかく語りき」読書案内、の詳細

(→ <http://www.1968start.com/M/blog/index3.html#2302>)

「ツァラトストラかく語りき」読書案内

中所武司

■このブログのきっかけ

2023.2.2の朝日の読書案内

「人類に贈る、「超人」への夢 『ツァラトストラかく語りき』 」について、
学生時代の読書体験があり、懐古趣味的視点で読んでみた。

<https://digital.asahi.com/articles/DA3S15544429.html>

■記事内容の要約とコメント (→★)

- ・現代思想に影響を与えるドイツの哲学者フリードリヒ・ニーチェ（1844～1900）の主著
「ツァラトストラかく語りき」（1884～85年）は、「ゾロアスター教開祖の言行録」
という新約聖書を意識した型破りのスタイルで書かれ、著者自ら
「人類がこれまで経験したことのない最大の贈り物」と称した思想書。
- ・ニーチェの言葉は、強烈に人の心を捉える。
- ・京都精華大准教授 佐々木中（49）談：
『ツァラトストラ』は、生の喜びを美しくうたいあげた、哲学史上最も偉大な書物。
- ・早稲田大名誉教授 竹田青嗣（75）談：
ニーチェは私の若い頃の『哲学の神』の1人。
学生運動に挫折し、すべてが空しくなった時、自分を立て直す手がかりを与えてくれた。

→★この方は、私の一学年下で、時代的には私と同じ。

私の所有する、世界の名著 46「ニーチェ」（中央公論社）は、
1966年11月発行（8版、480円）で、その中の「ツァラトストラ」（手塚富雄訳）を
1968年6月30日午前2時に読み終えている。大学4年生のときで、この年から
1969年1月に向けて、大学紛争は激化していった。

- ・中央大元教授 村井則夫（60）談：
ニーチェほど、著作の成立が生活や経験と密接に関連している思想家はいない。
若くしてバーゼル大教授となったが、体調不良で、職を辞さざるを得なくなる。
その後は乏しい年金に頼りつつ著作を発表するが、ほとんど話題にならなかった。
「自らの理想的な解釈者」と絶賛した女性との関係も「友達以上、恋人未満」で終わった。

- ・そんな中で、彼の哲学は、いかにして生きることを肯定し、絶望した人々を励まし、「喜びの大使」（ニーチェ自身の言葉）となるか、ということに照準を合わせ、逆境を生きる人々の心に今も刺さり続けている。

→★私も、いたるところに傍線を引いている。

当時、自分なりに気に入ったフレーズが多かったものと思われるが、後期高齢者になって、二十歳過ぎの自分に会えるのは楽しいものである。

- ・内容は、「役立つ知識を効率よく得られる分かりやすさ」とは対極にある。
- ・ハイデガー、ドゥルーズらの名だたる思想家の間でも、解釈には隔たりがある。
- ・村井・談：
難解極まるヘーゲルやカントの哲学書と異なり、一般の読者でも十分読める。
しかし、非常に語りづらいことを語ろうとしており、その真意をつかむのは難しい。
読む中で迷ったり頭を抱えたりする葛藤のプロセスを経験させることで、ニーチェは、読者の凝り固まった思考そのものを変動させたかったのでは。

→★私の場合も、ニーチェの思想の理解ではなく、断片的に自分に都合の良い解釈をして、多くの箇所に傍線を引いたと思う。

- ・「ツァラトゥストラ」に流れるニーチェの思想をあえて要約すれば、以下のようになる：
 - *科学の発展や教会の権威失墜で、人々は神の存在を信じられなくなった（＝神の死）。
 - *このままでは、不遇な者が成功者をねたみ引きずり落とす「ルサンチマン」や、逆に成功者が不遇な者を見下す「傲慢（ごうまん）」という低級な快楽にふける「末人（まつじん）（最後の人間）」が世にあふれるだろう。
 - *彼らは生の核心にある創造への意欲や憧れ（＝力への意志）を忘れ、そのため「すべては空しく、生きる意味はない」というニヒリズムに陥ってしまう。
 - *そこから脱出する鍵として、「永劫回帰」と「超人」という概念が示される。
「永劫回帰」とは、キリスト教が示す「未来における審判と救済」のアンチテーゼで、「この世界には始まりも終わりもなく、同じできごとが永遠に繰り返されるだけ」という世界観だ。
 - *一見、究極のニヒリズムと思えるが、ニーチェは「私たちの魂がたった一回でも、幸福のあまり震え響くなら、その一度のためにはすべての永遠が必要だった」という意味の言葉を残している。

→★なんとなく、ニーチェをニヒリズムと関連付けていたが、むしろ、ニヒリズムからの脱却あるいは克服を意図していたとのこと。

→★学生時代に作成した $\{A \neq \Omega \quad \alpha = \omega\}$ という表現を院生時代の名刺に記入し、その解釈の一つを以下のように記載したが、この本の影響の可能性がある。

「物事には初めと終わりがあるように見えるが、実は何もない」

<http://www.1968start.com/M/takeshi/index-alphaomega.html>

・竹田・談：

あなたが人生の中で一度でも、生の大きな喜びを味わうことができたならば、あなたは苦悩に満ちたこの人生のすべてを、神や真理という虚構に頼らずとも肯定できる。これが、ニーチェの真意と解釈する。

・村井・談：

ただし、ルサンチマンや傲慢の快樂にふける限り、「至高の時」は永久に訪れない。「ツァラトストラ」は、生の本質として「常に自らを克服せざるを得ない」とする。生きることの中に自然に備わる、自らをより高い者、異なった者へと変革しようとする意欲こそが『力への意志』であり、その力を自覚し、自らを絶えず変化させていくことが、いまだ現実には存在しない『超人』へと至ろうとする運動だ。

・佐々木・談：

ニーチェの思想の核心として「未来からさかのぼって過去を肯定すること」を挙げる。自分の人生や人類の歴史にどんなに認め難い過去があっても、それは変えられない。ルサンチマンの起源も、過去を変えられない憂さを他人への復讐で晴らそうとすること。だが、忌まわしい過去から生まれた現在の私たちの営みが、まだ見ぬ未来に『超人』という、今の自分たちには想像もできない、美しく偉大な存在を生みだせば、それは、私たち自身と忌まわしい過去を全肯定できることになる。こんなにも力強く人類を励ましたのは、歴史上、ニーチェが初めてではないか。

→★以下の拙著では、3編の冒頭でニーチェの引用句を掲載した。

この機会に簡単な解説を付しておく。

・「ソフトウェア危機とプログラミングパラダイム、－”わかりやすさ”の追求－」

(啓学出版、1992) <http://www.1968start.com/M/takeshi/index-niet.html>

第1編「ソフトウェア危機とパラダイム転換」

しかし、隣人たちよ、同胞たちよ。おまえたちはむしろ仮装しているのがいい、着飾って虚栄的で、「善良な者、正しい者」としての威厳を示しているのがいい。

(from p. 230 対人的知恵)

→★従来のソフトウェア生産技術は、信頼性や生産性の面で多くの問題を抱えているが、

危機意識が低いという状況を指摘したもの。

第2編「プログラミングパラダイム」

「友らよ、君たちは言うのだな、趣味と味覚は論争の外にあると。」

しかし生の一切は、趣味と味覚をめぐる争いなのだ。」

(from p.192 崇高な者たち)

→★1980年代には、従来の手続き型に変わる、種々のプログラミング技法が提案されたが、その優劣については、多様な意見があり、評価が定まらない状況を指摘したもの。

第3編「ソフトウェア展望」

「完全になったもの、熟したものは、みな一死ぬことを願う」そうおまえは語る。

だから葡萄を摘む鉄はしあわせだ。それに反して、成熟に達しないものはみな、生きようとする。いたましいことだ。

(from p.443 酔歌)

→★ソフトウェア生産技術に関する諸問題が近い将来に解決する見通しはなく、今後も悪戦苦闘するのではないかという状況を指摘したもの。

■記事の掲載図：【ニーチェが考えた「超人」】の説明

* ニーチェが危惧した近世人の生き方

<末人>愛や創造を知らず、安楽だけを求める

- ルサンチマン：他人への嫉妬、復讐心
- ニヒリズム：すべては空しい

↓

↓ (他人へのねたみをやめ、自分を見つめる)

↓ (ニヒリズムの徹底による反転)

↓

* ニーチェが理想とした生き方

<超人>生きる喜びと苦悩を味わい尽くし、自ら価値を創造する

- + 「力への意思」の肯定的活用
- + 「永劫回帰」の受容

以上